

能登半島地震 被災地視察・支援活動報告



◎目次

1. 活動について
2. 活動報告
 - ① 穴水町
 - ・避難所訪問とレクリエーション活動
 - ・支援団体・ボランティアとの交流
 - ・穴水町被災現場の視察
 - ② 輪島市
 - ・学校訪問
 - ・初任教員との語り合い
 - ・輪島市被災現場の視察
 - ③ 珠洲市・能登町ほか
3. 活動の総括と今後の展望
4. 参加ゼミ生の振り返り



1. 活動について

【経緯と概要】

2024年1月1日に発生した能登半島地震を受け、311いのちを守る教育研修機構(防災教育研修機構)は直後から、東日本大震災に向き合いながら災害対応を学ぶ311ゼミナールを土台として、学生とともに現地視察と支援活動に出向くことを検討した。交通や通信に課題がある半島部で起きた大災害のため被災地は混乱を極め、ボランティア活動は制約が大きかったことから、活動時期を3月以降の春休み期間中と定め、関係機関と調整を進めた。

311ゼミ担当の武田真一特任教授が、震災伝承活動で縁のある災害支援の有力団体であるNPO法人レスキューストックヤード(RSY、名古屋市)と連絡を取り、RSYが支援活動を展開する穴水町を拠点に活動する方針を決めた。RSYの受け入れによって、避難所にいる高齢者のケアや支援活動の手伝いなど具体的な活動が可能になった。ゼミ生はRSYのアドバイスを受けて避難高齢者の気持ちを和ませるお楽しみ企画として方言ラジオ体操、懐メロイントロクイズ等のレクリエーションを実施し、聴き取りもしながら被災者に寄り添った。支援ボランティアとの交流もあり、災害支援に必要な視点を学んだ。

別途、学校関係の視察等も検討していたところ、武田特任教授が毎年受け入れ対応している大東文化大学の311被災地視察活動の2022年9月の視察に参加していた田中柊麻(たなか・しゅうま)さんが卒業後に石川県の教員となり、初任として輪島市の小学校に勤めていることが分かり、連絡を取った。田中先生は、輪島高校に間借りして他の市内5校とともに合同で授業再開している勤務校・大屋小学校の校長と調整して学校訪問を導いてくれたほか、田中先生と同じ初任の同僚・梯円華(かけはし・まどか)先生とともに被災後の対応や児童の様子について語り合いに応じ、ゼミ生は災害時の教員の役割について深く考える時間を共有した。田中先生は、輪島市内の被災地のほか、住まいがある穴水町川島地区・由比ヶ丘地区で起きた16人犠牲の土砂崩れ現場のほか、津波被害があった珠洲市や能登町の被災後の街の様子も案内してくれ、能登半島全体の被災状況の把握につながった。

形式的な訪問ではなく、学生が被災現場の実情に深く触れる機会になった今回の視察・支援活動は上記の通り、RSYと田中先生の全面的な受け入れ協力によって可能になったものであり、深く感謝したい。

また、活動費用については、機構の前身・教育復興支援センター時代から有事対応としてストックしていたベルマーク教育助成財団の助成資金を活用した。併せて感謝申し上げる。

【活動に当たって定めた方針と注意点】

①前提

- ・311ゼミナールの活動として、能登半島地震被災の実情を視察、把握する
- ・311ゼミナールの活動として、被災地被災者の支援活動に当たる

- ・教員を目指す立場として、教員等、学校関係者の実情把握と支援に努める

②優先事項

- ・余震等に警戒し、安全第一、健康第一に活動、行動する
- ・現地支援活動団体の指揮に従い、無理のない範囲で貢献する
- ・被災地被災者の迷惑、負担にならないよう留意する(感染症に特に注意)

【活動参加者】

311ゼミナールの登録学生から希望者を募ったところ、20人が応募した。レンタカー移動が可能な人数として6人を上限とし、なるべくグループ横断で学年などの偏りが無いよう考慮して選考し、次の6人が参加者として決まった。

3年 一瀬辰之介 松川凜香

2年 高橋輝良々

1年 後藤咲佳 小原梨紗 村上陽亮(富山出身) 以上6名(男2名、女4名)

引率 武田真一

【行程】

3月17日(日)22:30 仙台発高速バス金沢行(仙台駅東口バスプール)

18日(月)07:45 金沢駅 ←村上陽亮は富山から向かい現地合流

10:00 金沢からレンタカー移動

12:30 穴水町着

・穴水町福祉施設「さわやか交流館プルート」内避難所で活動

・RSY拠点の学童保育所「おひさまくらぶ」泊

19日(火) 朝から活動継続(プルートの清掃補助)

10:00 輪島市朝市跡等視察

11:00 輪島高校内の小学校訪問

13:30 穴水町中居地区・住吉公民館内避難所で活動

16:00 終了、移動

18:00 富山県氷見市・民宿泊

20日(水)10:00 穴水町土砂崩れ現場視察

11:00 輪島市門前地区視察・初任教員2人と語り合い

14:00 珠洲市、能登町視察

19:30 金沢市泊

21日(木) 終日・金沢市内視察

22:40 金沢発高速バス仙台行 →村上陽亮は現地解散、富山へ

22日(金) 07:55 仙台駅・解散

2. 活動報告

①穴水町

【避難所訪問とレクリエーション活動】

■穴水町さわやか交流館「プルート」内避難所

3月18日(月)活動1日目は、穴水町さわやか交流館「プルート」を訪れた。社会福祉協議会も入る総合福祉施設は避難所になり、被災直後は最大300人ほどいたそうだ。訪ねた時は60-70人ほどが過ごしていた。

「避難所の高齢者は日中やることがないので、レクリエーション企画をぜひ考えてほしい」と事前にRSYからアドバイスを受けていたため、「方言ラジオ体操」「懐メロイントロクイズ」「ペットボトルボーリング」を企画し、メンバー内で意見を出し合って実施日までに用意を進めてきた。宮城県の訛りバージョンのラジオ体操で体を動かし、懐かしのイントロクイズでは楽しそうに手を挙げて答える姿が見られた。



交流館の方のお話の中で嬉しい情報があった。イントロクイズで積極的に手を挙げて歌を元気に歌っていた77歳の男性の方は、普段うつむいてばかりで暗い印象だったという。

「あんな笑顔は見たことがない」とスタッフの方は驚いていた。ここに来た意味はあったなと感じた瞬間だった。

レクリエーション以外ではRSYの活動を手伝った。トラックで運ばれてきた荷物を交流館の倉庫に運んだり、倉庫にある必要なものと捨てるものを分別したり、2時間ほど行った。地の方からは「1日かかるこの作業が半日で終わった。本当に助かった」と言われ、微力ながらも力になれたことを実感できた。後にも書くが、災害支援では支援活動を支える活動こそ必要とされていることが分かった。



■穴水町中居地区・住吉公民館避難所

3月19日(火)2日目は街の北東部・中居地区にある住吉公民館を訪れた。60代から90代まで7人が身を寄せる小さな避難所で、プルートよりも元気がないかもしれないということだった。少し緊張して公民館を訪れたが、温かく私たちを迎えてくれた。

前日のプルートでレクリエーションを行った際に、方言ラジオ体操についてはYouTubeを流すだけでなく自ら声がけしたほうがいい、と反省し、この日は「いづ、ぬ、さん、す…」という掛け声を一緒に声に出しながら体操をするということにした。



懐メロイントロクイズでも、正解がすぐに出ても曲のサビの部分が多めに流し、曲を楽しむ時間を作るなど工夫を凝らした。前日は時間がなくてできなかったペットボトルボーリングでは、5回戦まで行い参加者4人の中で優勝争いをし、大変盛り上がった。

前日同様イントロクイズとペットボトルボーリングでは、宮城県から持って行った、ずんだのお菓子など景品を用意した。より一層喜んでもらえたようだった。

レクリエーションが一通り終わると、語り合いの時間を持った。1人に対して私たち1人もしくは2人がつき、地震が起こった時に何をしていたのか、今困っていること、お孫さんのお話などたくさん聞かせてもらった。



お話の最後に「話すのがいちばん楽しい」と言ってくださった方がいた。

お話を聞けて私たちもとても勉強になったというだけでなく、“話をただ聞く”ということが少しでも避難所の方の力になったと思うと嬉しく感じた。

何かを特別に行うというわけではなく“ただ傍にいる”“ただお話を聞く”ということでも力になれることがあるということが分かった。



【支援団体・ボランティアとの交流】

穴水町での活動を引き受けてくれたのは、被災地支援のNPO法人「レスキューストックヤード」である。名古屋市に拠点があり、阪神淡路大震災を機に全国で被災地支援活動を展開している。東日本大震災では宮城県七ヶ浜町で主に活動してきた。

RSYは2023年5月にあった奥能登地震でも穴水町を支援しており、今回も発災翌日からスタッフが現地入りして、避難所運営の調整のほか、足湯マッサージなど避難所で生活する人々の生活支援を行っている。

18日の夜は、RSYが拠点にする学童保育所「おひさまくらぶ」が宿泊先になった。そこには九州や千葉など全国から集まったボランティアが40人ほど、60代から卒業前の大学生まで、さまざまな人たちが、寝袋持参、床に雑魚寝状態で寝泊まりしていた。私たちもその中で寝泊まりし、交流を深めた。



当時はまだ交通事情や宿泊事情が悪く、公的には個人的なボランティア活動は自粛が呼び掛けられる中だったが、RSYのようなしっかりした支援団体が受け入れ先になって、志ある人たちが集まって汗を流している状況を見て、民間支援団体の即

応性と機動力が被災地支援のカギになるという現実を確認できた。



また、避難者支援の基本についても学んだ。RSYの常務理事でずっと現地で活動の指揮を執っている浦野愛さんは「大切なのは生活の中からリハビリするという考え方」と話してくれた。避難者支援というと、身の回りの世話を支援者がしてあげる、という構図になりがちだが、それだと自立しないという。「避難所運営の主体はあくまで避難者にあり、ボランティアはその手伝いに過ぎない」と浦野さんは強調した。

プルートでは、掃除・洗濯といった家事を避難者自身が出来る範囲以内で行っている。ホワイトボードに仕事内容が書いてあり、やれそうな人がそこに自分の名前を書き、仕事をするというルールもあった。「自分でできることを探す」という方針が貫かれていた。避難所の整備や外の瓦礫撤去など町内の人々の支援活動に参加する住民も多くいたようだ。共同生活を送る中、自分の役割を見つけることで自己有用感を高めることができる。

避難者を支援の対象としてのみ捉えるのではなく、避難者や地域共同体を信じて、仕事を依頼することで自立的な避難所運営が行っている。これは大きな発見であった。

【穴水町被災現場の視察】

正直に言って、能登半島地震の被災地というと輪島市や珠洲市が思い浮かび、その他はさほどでもないだろうと勝手に思い込んでいた。

その通り、金沢市から穴水町まで向かう途中、羽咋市あたりまでは自動車専用道「のと里山海道」も高速通行可能だったが、日本海側から富山側に峠越えするあたりから、様相は一変した。谷川の路面ががけ崩れで大きく陥没し、輪島方面の下りだけ片側通行になった。工事が懸命に行われていたが、復旧にはかなりの時間がかかると受け止めた。

穴水町は奥能登では最も早く3月4日に水道が全面復旧しており、コンビニエンスストアやスーパーは営業していた。商品棚も一部空いていたところもあったが、食料や生活必需品は一定数確保されており、大きな不便はなかった。

ただし、市街地では一階部分がつぶれた家屋がそのままの状態、全壊認定の紙が貼られている家が多かった。共通点として瓦屋根の比較的古い家に被害が大きかった。新しい耐震基準で建てられた新しい住宅はおおむね崩れておらず、対照的な光景も印象的だった。中心部にある穴水大宮神社鳥居や灯籠が倒れたまま、正月飾りもそのままだった。穴水小学校も倒壊の危険ありということで閉鎖され、中学校に間借りして授業再開していた。

2か月以上経過しても、倒壊した建物が手つかずの状態にあり、震度6強の地震の恐ろしさ、その後の混乱の大きさをあらためて認識することになった。



それ以上に衝撃だったのは、輪島市の小学校教員、田中柊麻先生に案内してもらった川島地区・由比ヶ丘地区の土砂崩れ現場だった。田中先生は穴水町川島地区のアパートで暮らし、輪島市に通っていた。そのアパートのそばで大規模な土砂崩れがあり、16人が犠牲になったという。学校訪問や学校再開などの語り合いをするのが田中先生と会う目的だったが、20日に輪島市を訪れる前に、田中先生はぜひ被害を知ってほしい、と現場を案内してくれた。



土砂崩れは道路を挟んで東側斜面で起き、道路の反対側まで押し寄せ、家々をなぎ倒した。田中先生のアパートは少し盛り土してあったため無事だったが、地震の影響でドアが閉まらないなどの被害が出た。一帯では、正月で帰省していた家族などが巻き込まれ、16人が犠牲になった。8歳と11歳の子どものも含まれていたそう。穴水町の犠牲者20人のうち、ほとんどがこの現場だったという。

田中先生は土砂災害の恐ろしさを知ってほしい、と訴えつつ、「能登半島地震の被害という輪島市の朝市の大規模火災現場などが大きく取り上げられ、土砂崩れのはあまり思い返す人がいない。でも、こんな大変な被災現場があったこと、そのそばにわたしも暮らしていたということ、災害はどんなところで起きるか分からないということ」をぜひ、皆さんには知っておいてほしい」と語ってくれた。

東日本大震災でも被害が目立つところだけがクローズアップされ、その周辺の被災現場が忘れられそうになる、という事例が多くあった。被災をひとくりにせず、一つ一つの現場と向き合い、思いを寄せ、教訓を考えていくことの重要性を確かめることになった。

②輪島市

【学校訪問】

能登半島地震最大の被災地、輪島市は19日午前と20日に2度訪ねた。このうち学校訪問は19日、穴水町の支援活動の合間を縫う形で行った。20日が祝日で学校休業日のため訪問できず、少しでも学校現場の空気に触れておきたいとの私たちの希望を、田中先生の勤務校である大屋小学校の井上千佳校長が受け入れてくれて実現した。

大屋小も含めて輪島市中心部の6つの小学校は、校舎が損傷したり、避難所になったりした影響でしばらく学校再開できず、市内の中学校とともに、ようやく2月6日に合同で県立輪島高校の校舎を間借りする形で再開された。



化学実験室が職員室になっていたり、AL教室の札に「6年生」と紙を張ったりして急ごしらえの対応が目立った。

訪ねた時も、給食は、七尾市からボランティアが弁当を運んで対応する状況で、まだまだ混乱の中だった。

しかし、6つの学校の児童が学年ごとに一クラスにまとまり、教室でにぎやかに授業を受けている様子が見られた。音楽の授業でピアノの音が聞こえてきたときは学校の雰囲気があり、気持ちが和んだ。廊下では、まだ地元に戻れない児童のために、オンラインで授業をする先生の姿もあった。



田中先生は授業の合間に校内を案内してくれて、いろんなエピソードを教えてくれた。

机といすは高校生仕様では使えないため、校舎が損壊した近隣の河井小学校から先生たちが一つ一つ手作業で運び出し、そろえたそうだ。

厳しい中、何とかやりくりしながら学校を開き、子どもたちに学びの機会を保証している教員や関係者の努力の成果に触れ、学校教育の原点に思いを深めることになった。



井上校長には、防災教育研修機構の前身・教育復興支援センターが東日本大震災後の学校復興の記録をまとめた資料など10点近くを贈呈し、「今後の復興教育に役に立ててほしい」と激励した。

武田特任教授が代表を務める震災伝承の公益社団法人「3.11メモリアルネットワーク」がまとめた震災漫画「あの時、子どもだったわたし

たちから伝えたいこと」3分冊セットも併せて6校分を「子どもたちが能登半島地震の経験を伝え継ぐ世代になった際の参考になれば」と寄贈した。

学期末で異動期の多忙な中、6つの学校の校長が狭い部屋に机を並べて奮闘していた。慌ただしい中、短時間の訪問だったが、教員を目指す震災被災地からの学生の訪問に皆さんから「ありがたい」と感謝の言葉をいただいた。

【初任教員との語り合い】

被災当時、被災後の学校や教員の対応や様子について聞かせてほしい、との要望を田中先生が受け入れてくれて、20日水曜日に輪島市をあらためて訪ねた。祝日で学校休業日のため、田中先生は同僚の梯円華先生に依頼し、梯先生の実家である輪島市門前町の浄土真宗「願行寺」の客間を語り合いの場所として用意し、梯先生と2人で対応してくれた。

田中先生は2023年度に輪島市大屋小学校に赴任し、特別支援学級を担当、梯先生も同じ初任教員として大屋小に赴任し、1年生の担任を務めている中での能登半島地震だった。同期の初任教員ということで、互いに支え合って災禍に対応したという。



右端が田中先生、その隣が梯先生

<当時の状況>

■田中柊麻先生

当日は両親の実家の埼玉に帰省しており、そこで能登半島地震の発生を知った。30分後に井上千佳校長にメールで無事を連絡した。1時間後に返信があったが、校長先生は輪島市内の自宅で被災しており、情報が入らないと言っていた。県外にいる田中先生とは連絡がしたが、市内同士は連絡が繋がらなかったという。

1月9日くらいまではそういう状態。児童たちとはグーグル classroom で連絡を取ろうとしたが、停電で電気が通っていなくて使えなかったため連絡が取れなかった。何よりも児童の安否確認が喫緊の課題だったという。

そんな中、地震直後に田中先生は以前「何かあった時は、保護者連絡ツールのアプリ tetoru(テトル)が使えるかも」と教頭先生と何気なく話をしていたことを思い出した。保護者のスマホのLTEさえつながっていれば、テトルを用いて安否確認できるかもしれない、と校長に提案した。自分が指揮をとるから安否確認をやらせてくれと頼んだという。

地震発生から4時間後のやりとりだった。すぐに、埼玉にしながら、テトルのよる安否確認作業を始め、4日後にはほとんどの家庭からの連絡があった。連絡できない人も、ほかの人から避難所で見たとの情報で把握できた。狭い校区児童数が80人と少なく、自分がたまたま地震の時に県外にいたからこそできたことだが、素早く安否確認できたことは校長はじめ関係者に大いに感謝、評価されたという。この経験から、田中先生は「なんとはなし

のふだんの会話が災害時の対応につながり、子どもたちの命を救うかもしれないこともある。参考にしてほしい」と話してくれた。

田中先生の穴水町の自宅アパートは近くの土砂崩れのため住めなくなり、埼玉から戻ってからはひと月近く、輪島市の河原田小学校の避難所で避難生活をしながら、学校対応した。

河原田小は断水があっても山水のおかげで初日からお風呂に入ることができた。ほかのところではお湯が出ないなどの格差がうまれた。なんでうちだけとわがままになり、牛丼が配られたときに生卵はないかと言う人もいたという。「避難所は住めば都と言うように、3食そろそろし、髪もプロに切ってもらえるし、お客様になってしまう人もいる。被災者の中でもやっつけてあげる側とやっってもらう側が生まれる」と正直な感想を語ってくれた。

避難所の運営も、ちゃんとした人がトップに立てばうまくいく。田中先生のところはその土地の校長先生がやっていたので恵まれていた。ほかの先生が避難生活を送った学校避難所では、指揮を執る人がおらず、チョコ2枚だけで過ごしていたという。むしろ自主避難所はコミュニティが狭い分うまくいく。より仲良くなれるし、正月で豪華な食事があったから、腐る前にみんなで分け合って食べていたそう。規模の小さい避難所では、みんなに役割がある。だからうまくいく。でも規模の大きい避難所では役割がなく、できないのに口だけ出す人とかがいて混乱してしまうという。

■梯円華先生

地震当時は自宅のお寺にいた。揺れの前に一度珠洲で地震が起こった。珠洲での地震は2023年5月の奥能登地震くらいから度々あったが、今回は外に出られないくらいの揺れだった。お寺は雪囲いがあったため大丈夫だったが、近所では地震で慌てて外に出て瓦が落ちてきて頭に当たって手術をした人もいた。すぐ外に出ればいいわけでもない。囲炉裏を炊いていたため地震後に父が消しに戻ったが、囲炉裏を見に行き帰ってこない人も周りにはいた。危険を冒してでも火事を止めないといけませんが、そんなこともあった。家の下敷きになり、引っ張って助けてもらった人もいた。

近所の人と集まりはしたけれど、どうしようとなった。公民館に避難所が開設したけれど、人が殺到して、お年寄りや不自由な人を優先するため来ないでほしいと言われた。そのため近くの駐車場で3日、車中泊になった。車内ではテレビが見られたが、輪島市の火災の様子などばかりで、学校の様子などの自身が気になる必要な情報は入ってこなかった。外部から来るとしても道路が寸断されていて6時間かかり、危険と隣り合わせだった。水、食糧、ライフラインがないことが一番困った。そんなだから学校のことを気にかけている余裕などなかった。だから、外部にいる田中先生たちが動くことで助かったという。

たまたま自宅には、除雪機のためにガソリン3缶と満タンの用意があり、車で暖を取るため近所の人たちと分け合いながら過ごした。この時、自分は教員という公務員の立場で動

き回ったという。「やはり、災害時に住民が頼りにするのは、公務員。住民の皆さんのためにできることをしようという気持ちで過ごした」と話してくれた。

1週間後、ふだんは30分の道のりを3時間かけて大屋小学校に訪れた。救急車両、消防、自衛隊、民間の車が入り混じっており、時間がかかった。避難所となっていたため最初は学校どころでなく物資の仕分けなどの作業を行った。古着はだれももっていないためたまる一方だったそう。また、十分に手も洗えない環境であり、インフルエンザ、コロナ、ノロウイルスが流行っていた。梯先生も18日にインフルエンザにかかった。それでやっと休めたと思うほど、全員疲れ切っていた。

<学校のその後>

二人の話を総合すると、以下のようになる。奥能登のほかの地域では学校が早めに再開したところもあり、輪島を離れた家の子どもは学校に通っているのになぜ輪島では再開しないのか、とうちの子に勉強させてほしい保護者から問い合わせがあった。空いている教室で現況会を開く案も出たが、インフル等も流行っているし、集まっての授業は難しい。そのため、とりあえずできることとして、梯先生はじめ地元には先生たちは、輪島に残った子の家を訪ねて、安否確認を含めてドリルなどを配って歩いたそうだ。



大屋小学校



校庭では仮設住宅の建設が始まっていた

コロナのときにオンライン環境は整っており、電気が通ればWi-Fiもつながるため、オンライン授業は1月22日には始めることができた。国語、算数以外は遊ぶ時間、縄跳びをしたり、全国から来てくれたパトカーのサイレンをならしたり、自衛隊とドッチボールをしたりして楽しんでいった。授業というよりも、お話し meet を開いて、困っていることなど子どもたちといろいろな話をするのが中心だった。

2月6日に輪島高校に間借りして学校再開してからは、試行錯誤だった。再開後最初の3日間は3時間授業、その後給食の弁当が可能になり、1週間後からは5時間授業となった。はじめは9時授業開始だったが、8時15分授業開始に変更となった。先生たちは駐車場が足りないため乗り合いで都合をつけ、学校に通っていた。だから、家が遠い先生は、朝6時に家を出る人もいたという。

6つの学校が集まっているため、1学年9人ほどの教師がいる。教科ごとに先生を振り分けることになった。国語と算数の授業が得意な人は国語と算数など。ただし、授業進度も学校ごとに違い、用いるドリルも違う。まずは足並みそろえるところから始め、復習になる子どもたちも出てきた。遅れを取り戻すために。2年生以上は毎日6時間、授業を行っており大変そうだったという。また、毎日、7人くらいの先生に自分の授業を見られる状態だった。最初は大変だったが、慣れてきたらとてもそうでもなくなった。空きコマが出来て自分が支援に回るなど、働き方改革的にはいいこともあったという。

1年生担当はうまくいったが、ほかの学年では、頑張る先生とそうでない先生がいて差があり、一部の先生に負担が集中していたそうだ。災害時のことではあったが、それはふだんの姿勢にも通じることとして、「仕事は落ちているから積極的に探してね」と田中先生はアドバイスしてくれた。

学校統廃合も今後の課題になるようだ。西部の門前地区には二つの学校があり、西小は複式学級になるほど児童数が減って統合が取りざたされてきたが、住民の反対もあって見送られてきたという。それが、今回の地震で学校再開した際に、児童数の多い東小(梯先生の母校)で学校再開したところ、西小の子どもたちは大勢で学べる楽しさで生き生きしていたという。輪島市中心部の学校も含めて、地震によって統廃合は避けられない情勢で、西小のような事例も踏まえると、子どもたちにとってより良い学びができる環境づくりをいちばんに統廃合計画は検討されるべきだろう。

<教員を目指すゼミ生たちに伝えたいこと>

・田中先生

田中先生は2022年9月、大東文化大学4年生のときに、同大学が企画し武田特任教授が引率案内した311被災地視察アクティブラーニングに参加した経験がある。この視察には今回の視察支援活動に参加したゼミ生松川凜香さん(3年)も参加しており、1年半ぶりの再会だった。田中先生はその視察の際に石巻市大川小学校を訪ね、次女をなくした元中学教員の佐藤敏郎さんと語り合い、受け取った言葉が糧になっているという。

佐藤さんは大川小で起きたことを説明しながら、「子どものいのちを輝かせる場所が学校であり、いのちを輝かせる仕事が教員です」「ここでいのちが犠牲になったことにきちんと

向き合うことで、いのちに直結する先生の仕事はいかに素晴らしいかを見つめなおしてほしい」と語りかけた。

田中先生は教員になるうえで、震災被災地で得た「学校の先生は素晴らしい」というメッセージを正面から受け止め、輪島市に赴任し、初任で災禍に遭った。その通り、今回の経験で「教員として、子どもたちをこの先、救えるのかもしれないと感じた」「先生には向いていないかもしれないけれど、その中で、もがいて頑張ろうと思う」と語ってくれた。災害を経験して得られた学校の位置づけ、教員の再自覚。ゼミ生一同、互いのいのちを守り合える教育の重みにも目を開かされた。

・ 梯先生

梯先生は田中先生と初任同期だったことで、とても助けられたという。そのため「人とのつながりを大切にしてほしい。初めてあった人と一緒にやっていくときに、つながりを大切にすると広がっていく」「友達と電話をして話を聞いてもらうだけで楽になる。大切にしてほしい」と地震後の日々を思い返しながら、しみじみ語ってくれた。助け合える仲間職場で巡り合えた幸運を語る姿は、大変な状況を乗り切った人の実感だったと受け止めた。



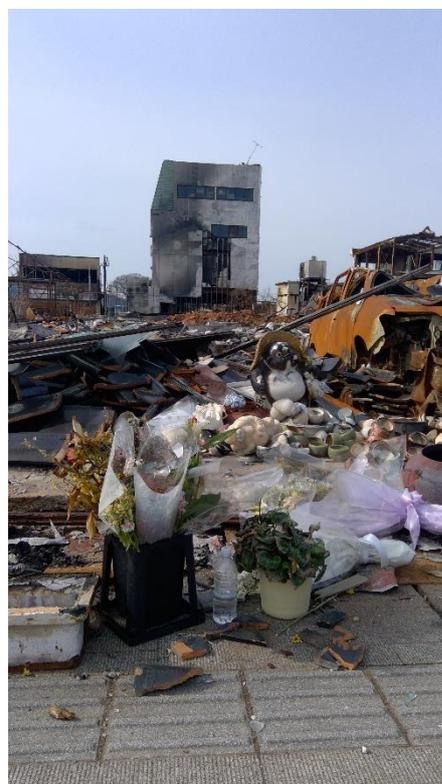
七尾市で仕出し弁当を調達し、差し入れて会食しながら語り合いをした



【輪島市被災現場の視察】

3月19日火曜日に学校訪問した際に輪島市朝市の家事現場、3月20日に語り合いをした際に輪島市門前地区を視察した。

輪島市は穴水町よりも建物倒壊の被害が大きかった。メディアでもよく取り上げられていた輪島塗五島屋の建物も横倒しになったままだった。そして、全焼してしまった朝市の火災跡も実際に道路を歩きながら視察した。





立入禁止のテープも立札もなく、焼け跡のそばを歩けた。建物も自動車も何もかもが鉄筋むき出しの状態、まるで空襲を受けたあとの光景だった。観光地の核だった輪島を舞台にしたNHK連続テレビ小説「まれ」の記念館も燃え、モニュメントだけがその跡を残していた。燃えた跡に残っているお店の看板や建物の中の様子、歩道だったと思われるメインストリートを見て、「ここにたしかに人々の営みがあったんだ」と感じられて非常に胸が苦しくなった。すべてが一瞬で消えてしまう火災の恐ろしさを身に染みて感じた。

輪島市朝市の火災被害では、道路の状況が悪かったことや大津波警報が発令されたことで海に近づくことができず、助けられる命をすぐに救出することができなかったようだ。過疎地域の道路の少ない半島で災害が起きたときにどのように迅速に救助をするべきか考えることがとても重要だと学んだ。

また、鉄筋がむき出しになってしまっていた建物が多く、朝市には木造の建築物が多かったのではないかと予想できた。伝統的で歴史のある木造建築物が多い地域で地震が起きたと

きの耐震対策や火災被害対策をどのようにするべきかについても考えなければならない課題だと感じた。

いずれにしても、町内の焼失、崩壊した建物はほとんど手つかずの状態で、一部料亭のようところでようやく解体作業が始まったところだった。どうやって街を再生させていくのか、観光復興の一つの手がかりとして、焼け跡などは遺構として保存して、地震火災の教訓を伝えるような取り組みも検討が必要と考えた。

20日には、田中先生と梯先生の案内で、西部の門前町も視察した。曹洞宗の総本山の一つ総持寺が創健された地域で、文字通り門前に栄えた観光地。しかし、被害は穴水町や輪島市朝市付近の被害よりもかなり深刻で、建っている建物がほとんど倒れていた。道路も半分壊れていて先に進めない場所もあった。瓦礫もそのまま残っていて復旧作業がなかなか進んでいないように感じた。しかし、地震前は京都のような歴史のあるとても素敵な街並みだったのだろうと建物が壊れていても想像することができた。



穴水町の土砂崩れ現場と同じように、私たちにとって門前町の被災はほとんど初めて知ることだった。メディアでほとんど報道されていない地域で、義援金もなかなか集まっていないと田中先生が話していた。市の中心部から離れているため、復旧作業自体が遅れている状況だった。

被害についてメディアでたくさん報道されて注目されている場所以外にも、より多くの支援が必要な場所もあることを知り、注目されていない被災地をどのように発信していったらいいのか、支援を広げていけるか考えることが重要だと学んだ。地震被害に関するメディアの報道責任についても深く考えさせられる視察だった。

④珠洲市・能登町

20日の田中先生、梯先生との語り合いの後、田中先生の先導で半島の先端地域である珠洲市、能登町を車で通り、視察した。

珠洲市は震源に近く、津波被害を受けて地震による犠牲が輪島市に次いで多かった地域である。名所の見附島前の公園駐車場に車を停めて歩いてみると、道路にまだ泥が残っていて津波の跡が見受けられた。軍艦のようにそびえていた見附島は地震と4メートルの津波により、東側の半分が崩落し、寂しい姿になったという。縁結びロードとして人気のあった海岸の鐘も地震の影響で土台が隆起して、大きなひびが入っていた。珠洲市はまだ水道が通っていなかったため、仮設トイレが多く置いてあった。また、公園のようなスペースに仮設住宅の建設が進められている場所も見受けられた。



風光明媚だったであろう観光地が無惨に変わり果てていて、胸が痛んだ。時間がなくて立ち寄れなかったが、珠洲市には海岸線が4メートル隆起したところもある。地震の驚異をあらためて確かめるとともに、「何年か後に必ずまた訪れて、この地がにぎわいを取り戻している様子を見てみよう」と誓い合った。

珠洲市から能登町を通過して穴水町まで海岸線を通る国道 249 号線は奥能登の幹線道路で、車で通りながら 2-3 か所で降りて、被災状況を視察した。沿道は倒壊した建物がそのままの状態



で、輪島市などと同じ光景だった。巨大なイカのモニュメント「イカキング」がある能登町小木地区の「イカの駅つくモール」にも立ち寄った。コ

ロナ雇用調整助成金を使った事業で話題になった「イカキング」は、津波を受けたものの目立った損傷はなく無事だった。意外に観光振興に役立っているということで、復興の光になることが期待されているようだ。

能登町の中心地、宇出津(うしつ)港は宮城県女川町の港の風景と似ていた。幸い大きな津波被災はなかったようだが、地震の影響で本格的な漁はまだ始まっていないという。



珠洲市と能登町を回って見ると、輪島市に象徴される大きな被災、家事現場以外に、地震や津波の爪痕がくっきりあちこちに広がっていることを確認できた。沿岸部でも入り江一つ違えば、被災の様子も違い、「能登」とひとくくりにはできないことが分かる。

ただし、被災は一様に深刻で、2 か月半たっても手付かずという印象が強かった。半島部も道路が寸断され、水道の回復も遅れた地域があるので、作業に必要な人手と物資が十分に被災地に届けられない実情に歯がゆい思いがした。おそらく、倒壊した建物の処理だけでもあと 2-3 年にかかるだろう。 一帯の生業の中心である漁業はどうなるのか、観光資源をどう立て直すのか、復興の課題はあまりにも多い。被災現場を見た者として、この地域の将来にずっと関心を寄せて、支援の在り方を考え続ける必要があると語り合った。

3. 活動の総括と今後の展望(ゼミ生のまとめをそのまま掲載、一部加筆)

今回の視察支援活動は、引率も含め7人と決して多くはない人数での活動になった。活動の拠点となった奥能登地方では道路が大きく崩れ、家屋は一階まですべて崩れてしまっているところも目立った。そんな中で私たちがレクリエーション活動を行う予定のプルートに行くところと多くのボランティア活動が行われており、時間の流れが速いかのように人が働いていた。

最初私たちはこの地域の役に立つことができるのか、必要とされているのかという不安があった。しかし、実際に町の人やボランティア団体の方々と仕事をすると「本当に助かった」「ありがとう」と言葉をもらい、私たちがボランティアに来た意味を感じた。

力仕事や清掃作業だけでなく、避難している方々へのレクリエーションも楽しんでもらうことができた。ボランティアの方や避難者の話によると、復旧作業等のボランティアは多いそうだが、レクリエーション活動のようなことは少ないらしく、避難地域全体として何か娯楽になるようなことができたことは意味のあることではないかと思う。

避難してきている高齢の方に対して「普段うつむいてばかりで暗い印象だったためあんな笑顔は見たことがない」とボランティアの方が言っていたように、楽しんで体を動かしたり、歌ったりしてもらえたのではないだろうか。

能登で教員をされている田中先生、梯先生との語り合いでは、教員目線で見えた今回の地震についてよく知ることができた。二人の先生はそれぞれ県外と県内にいるタイミングで被災したそうだが、話の中身をよく聞くとそれぞれ話された内容は違っていても、普段から働いている職場や保護者、地域住民やお隣さんたちなど身近な人のコミュニケーション、つながりの大切さを感じた。

東日本大震災でも聞かれた話だが、普段からのなんとなくの会話によって助かった命があることを再認識することができた。震災が起きた際の学校の在り方についても学ぶことができた。学校再開については上記の通りだが、いくつもの学校が一つの校舎に集まり学校運営を進めることは難しい部分が多いように感じる。しかし、コロナウイルスによるデジタル化促進によって恩恵があった部分もあり、先生や子供が一つに集まることの一長一短を感じた。田中先生には様々な地域に案内していただいた。

特に印象に残ったこととしては、報道であまり話題にならなかった地域のことだ。もちろん朝市が火災にあってしまった輪島も大きな被害を目の当たりにして感じるものがあったが、報道されない部分にもフォーカスして後世に伝える必要があると感じた。

今後の展望としては、能登半島地震を伝えていくことはもちろんのこと、震災後被災した地域がどのように復興したのか、今回のボランティア活動でお世話になった方々、触れ合った避難者がどのように生活しているのか、を継続的に知る必要があるのではないかと思う。

今後、避難者はどこで今後の生活をするのか選択をしなければならない。それだけでなく、避難所生活が終われば仮設住宅に住むことになる。東日本大震災の際もそうだったが、避難所生活よりも仮設住宅での生活の方が長くなることの方が多い。被災者の心身のケアなどを継続することが今後の課題になるだろう。

ぜひ再び、避難所で知り合った高齢者のもとを訪ね、田中先生や梯先生に再会し、語り合ってみたい。第二弾の視察支援活動を実現してほしい。今回のメンバー以外の人が行くことになった場合でも、情報を共有して、思いを託したい。

311 ゼミで活動していたからこそ、能登半島地震の被災を見つめる機会に恵まれた。災害をわがこととして捉える感性を大切にして、311 ゼミの活動の柱である足元の東日本大震災の出来事と教訓にしっかりと向き合う活動に継続して力を入れたい。



4. 参加ゼミ生の振り返り

■3年 一瀬辰之介

私は今までこのようなボランティア活動に参加したことは無かった。私たちが東日本大震災で避難者となった際に助けてもらったように、何かの役に立てればと思いこの活動に参加した。

活動をしていて思ったことは、震災の前に町に来てみたかったということだ。様々な町を視察したが、どの町も素晴らしいところだった。石川だけでなく、様々な地域に行つてその地域の良さを探してみたいと思った。ボランティア活動に参加して、被災者の目線ではなくボランティア活動に参加する人の目線で物事を見ることができるようになったのは今後の活動でも役に立つのではないかと思う。

また、先生方の話を聞き、1年後には教壇に立つ身として少しの恐怖を感じた。先生方のように子供や地域を守ることができるのか不安に思う。しかし、それと同時に責任感も感じることができた。あと1年の学生生活の中で、できることをしていこうと思う。

能登を訪れるまでは報道でしかこの震災を知る場面がなく、どこか他人事のように感じていたが、実際に活動に参加して形はどうであれこの震災に関わったものとしてこの震災について語り継いでいく必要があると感じる。いつになるかはわからないが、いつか必ず能登を訪れ、震災後どのように復興を遂げていくのかを見に行きたい。最後にこの活動を企画支援してくださった武田先生、一緒に活動した班のメンバーに感謝を申し上げる。

■3年 松川凜香

実際に視察を訪れることで、テレビでは放送されない実情を見ることができた。宮城で起こった出来事ではないため、自ら興味を持たなければ現在の状況を知ることはできないことを強く感じた。私自身、今回の視察で初めて知ることが多く、今後も意識して情報を取り入りたいと感じた。また、災害の発生地にいないからこそできることも多くある。当事者になった時はもちろん、当事者でないときにも自分にできることを探したい。

また、私は教員志望であるため、実際の学校の動きなどを知れたことはとても大きな財産になったと感じる。学校を再開するにあたって、場所の確保、授業進度の統一等大変なことは多くあったと思う。それは災害が起こる前に想定することは難しいと思うため、どんな場合にも対応できるよう、今回聞いた大屋小学校の様子を覚えておきたいと思う。

そして、今回、穴水町で出会った、ボランティアで来ていた大学生を見て、私も自分で一歩踏み出せるようになりたいと感じた。誰かからの指示を待っているだけではできないことは少ない。誰かのために、自分からという意識をもって行動していきたい。

■2年 高橋輝良々

私は、今回の活動で、能登半島地震で命が助かった人々が被災地で生きていることで感じる人々の温かさや強さ、切なさ、弱さを感じ続けた。自分のこの目で、奪われた命、崩れてしまった家や道路、火災に襲われた場所を見て、東日本大震災のときを思い出し、自分の記憶の中に入り込んでいるような不思議な感覚に陥った。

奪われたもの、失ってしまったものをみることは、自分が生まれ育った町ではなくても心が苦しくなる。しかし、石川の被災地を訪れて、私はその光景よりも、助かった人々が被災前の残された面影の中で、懸命に生きている姿が忘れられない。

生き抜くことができた人々は、この先残された景色の中で、生まれ変わっていく町の中で生きていく。被災した方とお話をして、もうどうしても戻ることのできない被災前の町の姿に切なくなったり、弱くなったりしてしまうことが何度もあることを改めて感じた。しかし、それと同じくらいに、復興のために県外から訪れてくれる人々がいること、人と人との温かくて優しい繋がりが被災した方にとって「生きる」ことを強くする。

被災地にいなくても、被災者じゃなくても、それを負い目に感じることなく、自分だからできることが必ずあるということを教えてもらった。私は、東日本大震災で被災者になったときからずっとその繋がりを感じていた。そして、心の中で、自分もいつかその繋がりを誰かに繋ぎたいとも思ってきた。その一步が、今回のこの活動だったのではないかと思う。だから、いつかの災害のときまでその繋がりを繋ぎ続けることができるように、教員としてできることを考え続けたい。

■1年 後藤咲佳

ボランティアに参加させていただき、自分の生まれ育った場所ではなくても非常に心が痛む地震の被害を目の当たりにして地震から2か月が経ってもまだまだ元通りの生活に戻るのには難しいことだと改めて感じた。

特にメディアでほとんど取り上げられていない穴水町の土砂災害の様子や輪島市門前地区の甚大な被害を見て、こういったあまり知られていない大きな被害にもしっかりと目を向けなければならないと強く思った。

そして、ボランティア団体の方々と過ごしたときに夜の打ち合わせをしている姿を見て、こういう人たちがいてくれるからこそ色々な支援活動が回っているのだと知り、ボランティアの存在の大きさを感じた。避難所での活動では東北弁ラジオ体操とイントロクイズ、ペットボトルボーリングをさせていただき、避難所の皆さんがとても楽しんでくださって嬉しく思った。震災時の様子を話してくださったときに涙を流しながら話をしてくれたおばあちゃ

んがいて、どうにか前を向いて生きていくしかないけれど震災前の暮らしは戻ることはできない辛い気持ちを痛いほどに感じた。

学校訪問もさせていただき、6つの小学校が輪島高校で授業をしている様子を見て、田中先生と梯先生からもお話を伺って、教師の公務員だからこそその使命や責任も身に染みて感じ、地域と学校の日常的な繋がり大切さを学んだ。教員を目指す私たちは子どもたちを災害時にどのように守るか、さらには災害後どのように子どもたちそして地域の方々を支えていくべきか真剣に考えて学び続けなければならないと改めて感じた。

災害はいつどこでどのように起きるか分からないので、震災と向き合い続けることでこれから起こるだろう災害に備え、今を生きている命、未来を生きる命を守ることが大切だと改めて考えさせられた。今後も石川能登半島への支援を継続し、仮設住宅で生活する方々への支援活動なども進めて今回のボランティアで出会ったすべての人たちと繋がり続けていきたいと思う。今回は貴重な経験をさせていただき本当にありがとうございました。

■1年 小原梨紗

昨年10月に311ゼミの活動として石巻市大川小を視察に行き、とても衝撃をうけたのを覚えているが、「震災遺構」というものは震災の恐ろしさを伝えるためにあえて残しているものである。しかし、今回金沢に行くまでに見たのは道中がぼこぼこになり、一方通行になっている光景。輪島で見た地震による火事で焼け焦げた一面。これらの光景は2か月半前に起こった能登半島地震の被害のありのままの姿だった。

修復が間に合っていない状態の被害を見るのは初めてだった。私が特に印象に残っているのはやはり輪島で見たあの光景だった。表現があっているかは分からないが、まだ焦げ臭いが残る戦後の日本のように感じてしまった。お皿やコップ、読みかけの本など人々が生活していたまま焼けてしまっていた。

今回訪れる前までは能登半島地震のニュースを第三者目線で見れていたが、この視察を通し、仙台にいる今でもニュースで能登半島が取り上げられる度に手を止めて見てしまったり、避難所でお話した方々は元気でやっているかなと考えたりなど身近に感じたりするようになった。

現地ではボランティアを支えるボランティアの方も実際にいて、その方々も欠かせない大切な存在であるということは実際に訪れたからこそ分かる事実である。車のナンバーやパトカーに書いてある「〇〇県警」を見ても分かるが、北から南まで様々な地名が見られた。ボランティアを見ても老若男女日本各地から来ていることが分かった。

活動に参加したことで、物事の捉え方や感じ方が大きく変わり、自分の中で何かが変わった気がする。教員になる前にこのような貴重な経験ができて自分は本当に恵まれていると思

う。選んでくださった武田先生に感謝である。この経験を他のゼミ生、友達や家族、そして将来子ども達に伝えていきたい。そしてこれで終わりなのではなく、SNSなどを通して能登半島の情報を追い、近いうちに金沢を訪れてその後を絶対に見に行きたい。

■1年 村上陽亮

私は今まで「被災地」を自分の目で見たことがなかった。映像や伝聞で聞く話から、人的被害や家屋のダメージといった数値的なものは理解できても、現地にいる被災者や支援者を含めた人々の実情や心理などの内面に隠されたものは気づかれにくい。今回の能登半島地震でも、被災地域の北陸、富山県出身とはいえ自分の周囲では被害が大きくなかったためニュース以上のことは分からなかった。しかし、本視察ではスポットライトが当たりにくい「一般人」の生の声を聞くことができた貴重な経験だったと言える。

視察で巡った奥能登地域には、ブルーシートが被さったままの家、瓦礫の山に埋もれた家具や車は至る所にあった。特に輪島朝市の跡地では、数ヶ月経った今も焦げた臭いが残っており、焼け残った建物の鉄筋と看板は非常にショッキングであった。確かにそこには「営み」があったはずなのに、一瞬にして無くなってしまったのだ。

しかし、奥能登から「営み」が完全に消えたわけではない。その灯は避難所や学校に残っていた。避難所では公務員やボランティアだけでなく、被災者自身が運営に主体的に参画している。また、学校現場では教員やカウンセラーなど多くの人々が協力し合って、子供たちの教育・生活の保障をしている。

多くの人の会話を通して感じた「能登人の強さ」はこれらの例が示すように、住民の相互関係の強さ、つまり地域共同体の強靭さにあるのではないかと思う。この仮説は今後のゼミ活動を通して考えていきたい。